㈶米子市教育文化事業団
文化財発掘調査報告書 42

鳥取県米子市

吉谷屋奈ヶ埆遺跡

第1次・第2次調査

2003

米子市教育委員会
財団法人　米子市教育文化事業団

序

米子市は鳥取県西部の中核都市で、北に雄大な日本海、東に秀峰大山を臨む豊かな自然環境に恵まれています。また、古代からの遺跡の宝庫で、市内には古代人の生活や文化等を物語る貴重な遺跡が数多く存在しております。

当事業団では、この度、一般国道１８０号道路改良工事に伴い、吉谷屋奈ヶ埼遺跡の発掘調査を行ってまいりました。その結果、弥生時代後期の遺構が確認されるなど、貴重な成果を得ることができました。

これらの資料が今後の調査研究および教育のために広く活用され、さらに、広く一般の方々に埋蔵文化財に対する理解、関心を高めていただくうえでお役にたてれば幸いに思います。

最後になりましたが、調査に際しましては多大なご理解とご協力をいただきました地元の皆様をはじめ、ご指導、ご支援を賜りました調査従事者並びに関係各位に対し、心から感謝申し上げます。

平成15年（２００３年）３月

財団法人　米子市教育文化事業団

理事長　　山　岡　　宏

例　　言

1．本書は鳥取県米子市吉谷において実施した一般国道180号道路改良工事に伴う吉谷屋奈ヶ塚遺跡第１次調査と第２次調査の発掘調査報告書である。
2．発掘調査は鳥取県米子土木事務所（現鳥取県米子地方県土整備局）の委託を受けて第１次調査は財団法人米子市教育文化事業団が平成12年度（2000年度）に、第２次調査は米子市教育委員会が平成13年度（2001年度）に実施した。
3．本書は高橋、下高が執筆し、高橋が編集した。
4．出土遺物、実測図、写真等は米子市教育委員会で保管している。

凡　　例

1．本書に用いた方位は第２図が真北を示している以外は座標北を示し、高度はすべて海抜高である。また、座標値は国土座標第Ⅴ系を用いた。
2．第１図は１：2,500 国土基本図「米子・境港都市計画計画図（米子市）46」を拡大複製し、加筆したものである。また、第２図は国土地理院発行の１：25,000地形図「米子」、同「母里」、同「淀江」、同「伯耆溝口」を縮小複製、合成し、加筆したものである。
3．本書に用いた遺構の略号は以下のとおりである。
　ＳＤ：溝状遺構　ＳＳ：段状遺構
4．本文、挿図、表及び写真図版中の遺物番号は一致する。
5．遺物観察表中の※は復元値を、△は残存値を示す。
6．第２次調査の調査区名は報告書作成時に以下のとおり変更した。

旧調査区名		新調査区名
１　区	→	４　区
２　区	→	５　区

目　　次

序
例　　言
凡　　例
目　　次
第１章　調査の経緯 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査の経過と方法 …… 1
　第３節　調査体制 …… 2
第２章　位置と環境 …… 4
　第１節　地理的環境 …… 4
　第２節　歴史的環境 …… 4
第３章　第１次調査の成果 …… 7
　第１節　調査の概要 …… 7
　第２節　検出した遺構と遺物 …… 7
　第３節　遺構外出土遺物 …… 13
第４章　第２次調査の成果 …… 16
　第１節　調査の概要 …… 16
　第２節　検出した遺構と遺物 …… 16
　第３節　遺構外出土遺物 …… 16
第５章　まとめ …… 20
遺物観察表
写真図版
報告書抄録

挿　図　目　次

第１図　調査区配置図 …… 3
第２図　調査地及び周辺遺跡分布図 …… 6
第３図　上層図 …… 8
第４図　遺構配置図 …… 9～10
第５図　ＳＤ－01遺構図 …… 11
第６図　ＳＤ－01上層出土遺物実測図 …… 11
第７図　ＳＤ－01下層出土遺物実測図 …… 12
第８図　ＳＤ－02遺構図 …… 13
第９図　遺構外出土遺物実測図（１）…… 14
第10図　遺構外出土遺物実測図（２）…… 15
第11図　ＳＳ－01遺構図 …… 17
第12図　ＳＳ－01出土遺物実測図（１）…… 18
第13図　ＳＳ－01出土遺物実測図（２）…… 19
第14図　遺構外出土遺物実測図 …… 19

図　版　目　次

図版１　全景（北から）
　　１区全景（東から）
　　１区斜面（北から）
図版２　２区・３区全景（北から）
　　ＳＤ－01（東から）
　　ＳＤ－02（西から）
図版３　ＳＳ－01（北から）
　　ＳＳ－01西側断面
　　５区遺物（84、85）出土状況
図版４　ＳＤ－01出土遺物
図版５　１～３区遺構外出土遺物
図版６　ＳＳ－01出土遺物
図版７　５区遺構外出土遺物

第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯

本発掘調査は、鳥取県が事業主体である一般国道180号（米子バイパス）道路改良工事に伴い、米子市古谷地内において実施したものである。

米子バイパスは米子市陰田町の山陰自動車道陰田ランプを起点として、同市新山、古市、古谷を経て、西伯町へと通じる路線である。

この改良工事は、南北幹線道路の整備と米子市街地の交通渋滞の緩和を目的としたもので、現在までに米子市陰田町の山陰自動車道陰田ランプ～同市新山の県道米子広瀬線間が開通している。

本事業に伴う発掘調査は平成元年度（1989年度）から行われ、米子市陰田町から同市新山にかけては国道180号バイパス関係埋蔵文化財発掘調査団及び財団法人米子市教育文化事業団、同市古市においては財団法人鳥取県教育文化財団、同市古谷においては財団法人米子市教育文化事業団及び財団法人鳥取県教育文化財団によって実施され、縄文時代～中世の遺跡が確認されている。

今回の調査地については平成11年度（1999年度）に米子市教育委員会によって試掘調査が行われ、弥生時代後期の遺構と遺物が確認された。これを受けて鳥取県土木部道路課及び鳥取県米子土木事務所（現鳥取県米子地方県土整備局）は米子市教育委員会と協議を行い、事前の発掘調査を財団法人米子市教育文化事業団に委託した。これにより、平成12年度（2000年度）に財団法人米子市教育文化事業団が発掘調査（第１次調査）を実施した。なお、その後、平成13年度（2001年度）の工事着手前に工事による掘削範囲が拡がることとなり、米子市教育委員会により緊急の発掘調査（第２次調査）が行われた。

第２節　調査の経過と方法

吉谷屋奈ヶ谷遺跡は米子市吉谷に所在する弥生時代中期中葉から奈良時代に至る複合遺跡である。

調査地は鳥取・島根県境に聳える母塚山（標高272ｍ）を頂点とする山塊から北へのびる丘陵の東側縁辺部に位置し、この丘陵からさらに東へ派生する尾根の東側と北東側の斜面及びその北東側の谷部に立地している。

第１次調査の現地調査は平成12年（2000年）２月に着手した。

調査は、排土を場外へ搬出することになっていたが、現状では尾根の北東側と谷部は排土搬出用道路を敷設しなければ重機や土砂運搬車が入ることができず、排土を搬出できないため、最初に尾根の東側斜面の調査を行い、その後に、この部分に重機や土砂運搬車が通行できる排土搬出用道路を確保し、尾根の北東側と谷部の排土を搬出しながら調査を行った。なお、調査を行うにあたっては、調査区を便宜的に３つに分け、尾根の東側斜面を１区、尾根の北東側斜面を２区、尾根の北東側斜面裾部から谷部にかけてを３区とし、１区→２区→３区の順で調査を行った。

調査は、試掘調査の結果を勘案しながら重機により表土を除去した後、人力により掘り下げを行い、遺構、遺物の検出を行った。現地調査は平成12年（2000年）３月に終了した。

第２次調査は平成13年（2001年）10月に着手した。調査着手時には、隣接する平成12年度（2000年度）の調査地が工事により既に掘削されているために重機が入ることができず、そのため、表土から人力により掘り下げを行い、その後、遺構、遺物の検出を行った。

平成14年度（2002年度）は出土遺物の整理作業、調査成果のまとめを行い、発掘調査報告書を刊行した。

第３節　調査体制

発掘調査は下記の体制で行われた。

第１次調査（平成12年度）

調査主体　財団法人　米子市教育文化事業団
理 事 長　森山隆朝（米子市長）
専務理事　山岡　宏（米子市教育委員会教育長）
事務局長　清間　勉
埋蔵文化財調査室
室　　長　古前勝茂（米子市教育委員会文化課長）
次　　長　矢倉紀夫

調査担当　財団法人　米子市教育文化事業団　埋蔵文化財調査室
調 査 員　高橋浩樹

調査指導　鳥取県教育委員会　鳥取県埋蔵文化財センター　米子市教育委員会

第２次調査（平成13年度）

調査主体　米子市教育委員会　文化課
教 育 長　　山岡　宏
課　　長　　妹澤佐智夫
課長補佐　　小原貴樹

調査担当　米子市教育委員会　文化課
主　　任　　下高瑞哉

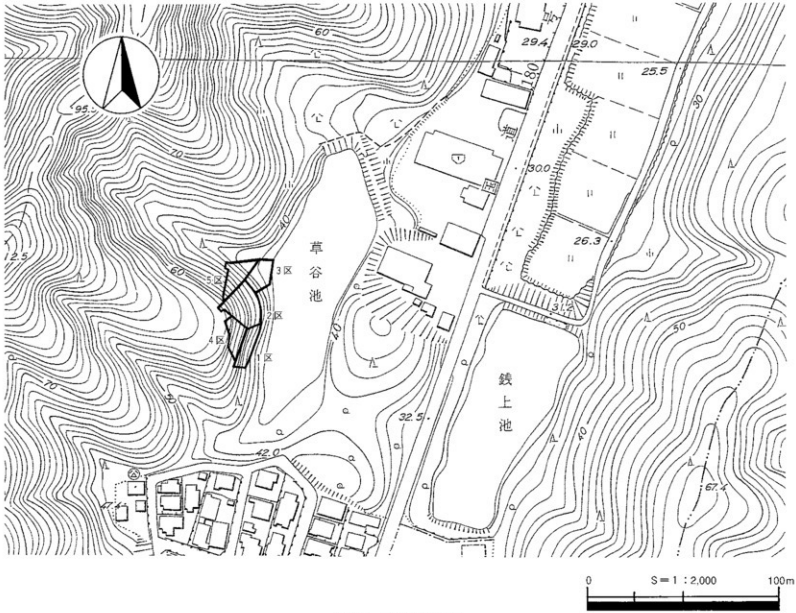
調査指導　鳥取県教育委員会　鳥取県埋蔵文化財センター

報告書作成（平成14年度）

事業主体　財団法人　米子市教育文化事業団
理 事 長　森山隆朝（米子市長：平成14年４月１日～平成14年５月27日）
山岡　宏（米子市教育委員会教育長：平成14年５月28日～）
専務理事　山岡　宏（平成14年４月１日～平成14年５月27日）
小林道正（財団法人米子市教育文化事業団　事務局長：平成14年５月28日～）
埋蔵文化財調査室
室　　長　妹澤佐智夫（米子市教育委員会文化課長）
次　　長　矢倉紀夫

事業担当　財団法人　米子市教育文化事業団　埋蔵文化財調査室
調 査 員　高橋浩樹
臨時職員　遠本富代　福嶋昌子

調査指導　鳥取県教育委員会　鳥取県埋蔵文化財センター　米子市教育委員会


草谷池
錢上池
3区
2区
4区
1区
29.4
29.0
25.5
30.0
26.3
31.2
32.5
42.0
67.4
0
S＝1：2,000
100m

第１図　調査区配置図

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

米子市は鳥取県の最西端に位置する鳥取県西部の中核都市であり、古くから「山陰の商都」と称されてきた商業都市である。

米子市の地勢は市の東部を北流する日野川によって形成された米子平野を中心に、その北西には弓浜半島と中海、北には日本海、東には大山からつづく丘陵、南から南西には中国山地からつづく山地や丘陵が取り囲んでいる。さらに、米子平野は日野川によって形成された扇状地性の沖積湿地である日野川扇状地を中心にして、その北側の低地と発達した２条の砂州からなる日吉津低地、南西側の法勝寺川によって形成された沖積性の河谷低地である法勝寺川理積谷低地（法勝寺平野）、西側の米子市街地の大部分をのせる米子低地（沖積地）からなっている。

吉谷屋余ヶ塔遺跡は米子市吉谷に所在する。この地は米子市の南西部に位置し、市街地から直線距離で約５km にある農村地帯で、南へ約300ｍ行くと西伯郡西伯町、西へ約２km行くと島根県となる。

調査地は法勝寺川左岸に位置し、鳥取・島根県境に聳える母塚山（標高272ｍ）を頂点とする山塊から北東にのびる丘陵の東側縁辺部に位置し、さらにこの丘陵から東へ派生する丘陵の東側と北東側の斜面及びその北東側の谷部に立地している。

第２節　歴史的環境

周辺での人々の生活の痕跡は縄文時代草創期まで遡り、陰田宮の谷遺跡（19）、奈喜良遺跡（10）、吉谷亀尾ノ上遺跡（38）、諸木遺跡（43）からは尖頭器が出土している。

縄文時代早期には大山西麓に遺跡が集中しており、日野川左岸では清水谷遺跡（39）と新山山田遺跡（26）から押型文土器が少量出土しているのみである。

早期末～前期になると中海沿岸で集落の形成が行われるようになり、このような遺跡には目久美遺跡（１）、陰田第１遺跡（18）、陰田第７遺跡（15）、陰田第９遺跡（17）がある。目久美遺跡は縄文時代早期末～弥生時代中期の遺跡で、当該期には貝殻条痕文土器、爪形文土器、多量の石鏃、動植物遺体が出土している。

中期には遺跡の数が減少する傾向にあり、現在のところあまり明確にされていないが、周辺では目久美遺跡でドングリ貯蔵穴が多数確認されている。

後期には大山西麓や中海沿岸の低湿地に加えて米子平野南部の丘陵上にも遺跡が見られるようになる。この時期の遺跡には目久美遺跡、陰田第１遺跡、陰田第７遺跡、古市カハラケ田遺跡（29）、古市河原田遺跡（30）、青木遺跡（９）などがある。

晩期には目久美遺跡、青木遺跡、奈喜良遺跡、新山山田遺跡、新山下山遺跡（24）、古市河原田遺跡などがあり、古市河原田遺跡からは晩期後葉の突帯文土器がまとまって出土している。

弥生時代になると海岸線が後退するとともに沖積が進み、低湿地にて農耕が開始される。

前期には目久美遺跡では低湿地水田と微高地に営む集落を形成し、長砂第１遺跡（３）でも前期後葉～中期初頭の水田が確認されている。また、前期末～中期前半には清水谷遺跡、諸木遺跡、宮尾遺跡（45）、天王原遺跡（51）で断面Ｖ字状の環濠が確認されている。

中期には遺跡の数が増加し、その立地範囲も拡大し、目久美遺跡、長砂第２遺跡（４）では水田が確認されている。

中期後葉～後期には遺跡は低地から低丘陵へ移動する傾向にあり、前期～中期の拠点的集落は継続するものは少なく、青木遺跡、福市遺跡（8）、妻木晩田遺跡、越敷山遺跡群のように新たに拠点的集落が形成され、古墳時代へと継続する。

古墳時代は前期に日原6号墳（7）、善段寺1号墳（50）などが築かれ、善段寺1号墳からは三角縁神獣鏡が出土している。前期の集落には青木遺跡、福市遺跡、古谷上ノ原山遺跡（36）、古谷トコ遺跡（37）、奈喜良遺跡、清水谷遺跡などがある。

中期には西伯耆最大規模を誇る三崎殿山古墳（44）、福成4号墳（40）などがあり、福成4号墳では頭蓋骨を朱塗りした人骨が箱式石棺に埋葬されていた。中期の集落には青木遺跡、福市遺跡、奈喜良遺跡、古谷トコ遺跡、新山山田遺跡、新山研石山遺跡（25）、清水谷遺跡などがある。

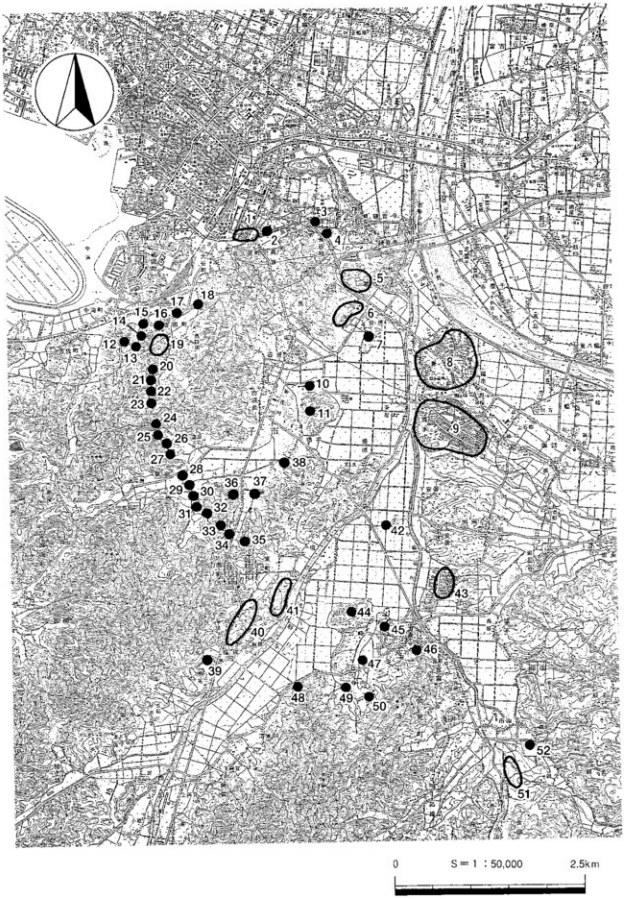
後期には群集墳がつくられるようになり、この周辺には古市古墳群、新山古墳群、新山山田古墳群（27）、福成古墳群（40）がある。また、この地域は横穴墓の隆盛する出雲地方の影響を受けて、6世紀後半に横穴墓の築造が開始される。50基にも及ぶ鳥取県最大の陰田横穴墓群、大塔山横穴墓群、マケン堀横穴墓群などがあり、これらはいずれも後背部に墳丘を有するという特色をもつ。後期の集落には青木遺跡、福成旱里遺跡（41）、清水谷遺跡などがある。

飛鳥～奈良時代には新山遺跡群（24～26）、奥陰田遺跡群（16・19～23）、陰田遺跡群（12～14）などがあり、これらはいずれも丘陵斜面を加工して平坦面をつくり、そこに掘立柱建物などを構築している。また、これらの遺跡では鉄生産を行っており、7世紀後半以降、官衙的性格が強くなる。

中世には周辺では新山城（長台寺城）、橋本宝石城（11）が築城される。

1 目久美遺跡	2 池ノ内遺跡	3 長砂第1遺跡	4 長砂第2遺跡
5 東宗像古墳群	6 宗像古墳群	7 日原6号墳	8 福市遺跡
9 青木遺跡	10 奈喜良遺跡	11 橋本宝石城	12 陰田荒神谷遺跡
13 陰田小犬田遺跡	14 陰田ヒチリザコ遺跡	15 陰田第7遺跡	16 陰田第6遺跡
17 陰田第9遺跡	18 陰田第1遺跡	19 陰田宮の谷遺跡	20 陰田広畑遺跡
21 陰田隠れが谷遺跡	22 陰田ハタケ谷遺跡	23 陰田夜坂谷遺跡	24 新山下山遺跡
25 新山研石山遺跡	26 新山山田遺跡	27 新山山田古墳群	28 古市流田遺跡
29 古市カハラケ田遺跡	30 古市河原田遺跡	31 古市コガノ木遺跡	32 古市宮ノ谷山遺跡
33 吉谷屋奈ヶ谷遺跡	34 吉谷銭神遺跡	35 吉谷中馬場山遺跡	36 吉谷上ノ原山遺跡
37 吉谷トコ遺跡	38 吉谷亀尾ノ上遺跡	39 清水谷遺跡	40 福成古墳群
41 福成旱里遺跡	42 大袋丸山遺跡	43 諸木遺跡	44 三崎殿山古墳
45 宮尾遺跡	46 天万遺跡	47 天萬上井前遺跡	48 枇杷谷遺跡
49 寺内8号墳	50 善段寺1号墳	51 天王原遺跡	52 口朝金遺跡

表1　周辺遺跡一覧表



第２図　調査地及び周辺遺跡分布図

第３章　第１次調査の成果

第１節　調査の概要

第１次調査地は東へのびる尾根の東側と北東側斜面及びその北東側の谷部に位置する。現況は山林となっており、調査着手時には既に伐開され、倒木の大部分は搬出されていた。しかし、倒木を搬出する際に尾根の東側と北東側の裾部（調査区内）を掘削して搬出用の道が設けられていた。

調査で生じた排土は場外へ搬出することとなっていたが、尾根の北東側とその北東側の谷部の排土を搬出するには倒木の搬出用の道は幅が狭く、土砂運搬車が通行することはできないため、まず、尾根の東側斜面を調査した後、倒木の搬出用の道を拡幅し、排土を搬出しながら尾根の北東側とその北東側の谷部の調査を行った。

調査は尾根の東側斜面を１区、北東側斜面を２区、尾根の北東側斜面裾部から谷部にかけてを３区として行った。

検出した遺構は溝状遺構２条である。

第２節　検出した遺構と遺物

ＳＤ－01（第５図～第７図）

ＳＤ－01は２区で検出した。ＳＤ－01は北西側は調査区外へのび、北東側は削平されているため全容は不明であるが、北西から北東へ湾曲してのびており、現状で長さ6.0ｍ、幅2.4～3.0ｍ、深さ20～30㎝をはかる。埋土は２層に分かれ、上層は基盤上状の淡褐色土で、上部からの流入土である可能性がある。下層は灰色土で、炭が混じっている。

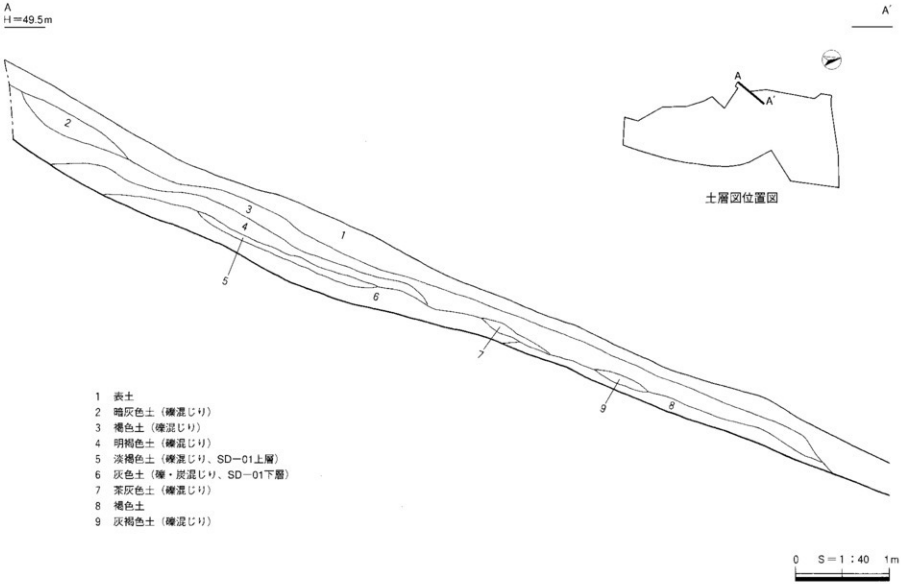
遺物は弥生土器が出土した。１～４は上層から出土したもので、いずれも複合口縁を有する甕である。１は口縁が外傾気味に立ち上がり、口縁帯下端は下垂している。また、外面には７条の擬凹線が巡っている。２～４は口縁が外反気味に立ち上がるもので、３の口縁端部は肥厚する。２、３は口縁帯下端の稜はにぶいが、４の口縁帯下端の稜は鋭い。３の外面には摩滅のため条数は不明であるが、擬凹線が巡っている。５～18は下層から出土したものである。５～７、11～15は甕、８～10は壺である。５は口縁が内湾気味に立ち上がり、口縁帯下端は下垂している。また、外面には４条の擬凹線が巡っている。６～15は口縁が外反気味に立ち上がるもので、６、７の口縁帯下端は下垂し、８～10の口縁帯下端は横方へ突出している。９の口縁外面には擬凹線、頸部外面には波状文が巡り、頸部内面にはヘラミガキ調整が施されている。11～15は口縁帯下端が下垂あるいは横方へ突出しないもので、11～14の口縁帯下端の稜はにぶいが、15の口縁帯下端の稜は鋭い。16、17は底部である。18は高坏で、坏部中央付近で段をなして、口縁は外反気味に立ち上がる。

時期は出土遺物から弥生時代後期中葉～後葉頃であると考えられる。

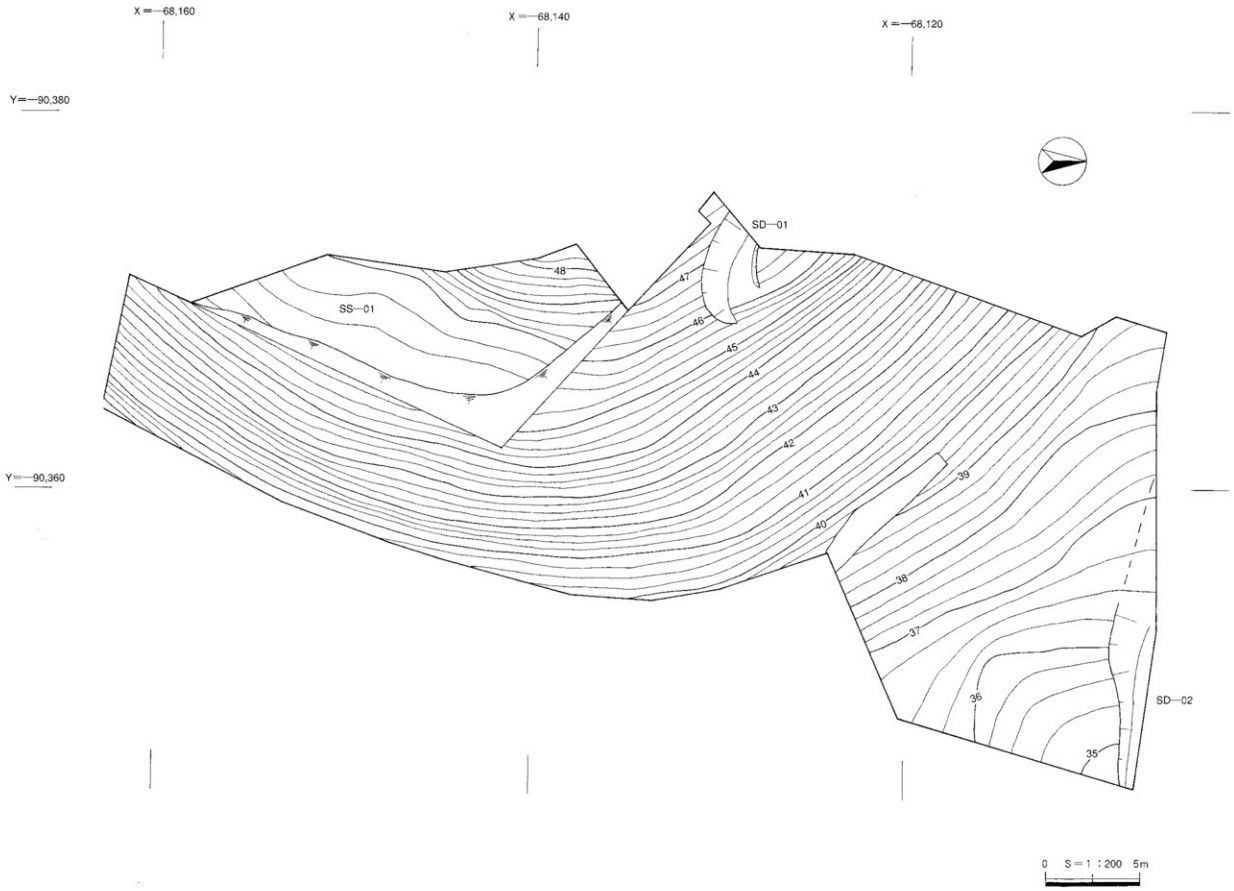
ＳＤ－02（第８図）

ＳＤ－02は３区で検出した。北側の肩は確認できなかったが、現状で長さ9.8ｍ、幅0.7～2.4ｍ以上、深さ40～70㎝をはかる。ＳＤ－02は谷筋に沿ってのびており、谷頭から東側の池へと通じる自然流路である。

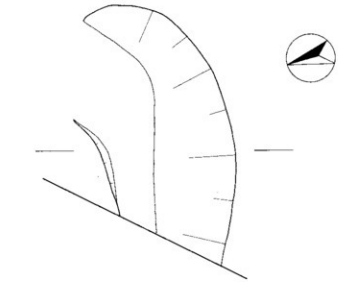
遺物は出土しなかった。

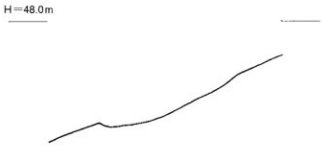

A
H＝49.5m
A′
A
A′
土層図位置図
1
2
3
4
5
6
7
8
9
1　表土
2　暗灰色土（礫混じり）
3　褐色土（礫混じり）
4　明褐色土（礫混じり）
5　淡褐色土（礫混じり、SD－01上層）
6　灰色土（礫・炭混じり、SD－01下層）
7　茶灰色土（礫混じり）
8　褐色土
9　灰褐色土（礫混じり）
0　S＝1：40　1m

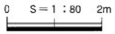
第３図　土層図


X＝−68,160
X＝−68,140
X＝−68,120
Y＝−90,380
Y＝−90,360
SD−01
SS−01
SD−02
48
47
46
45
44
43
42
41
40
39
38
37
36
35
0 S＝1：200 5m

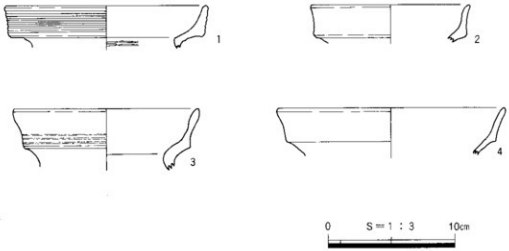
第４図　遺構配置図



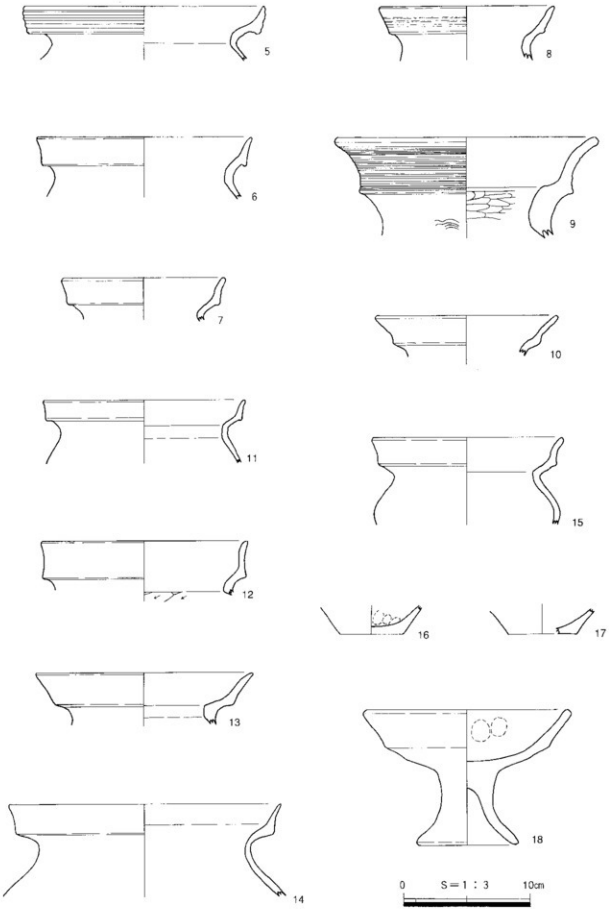




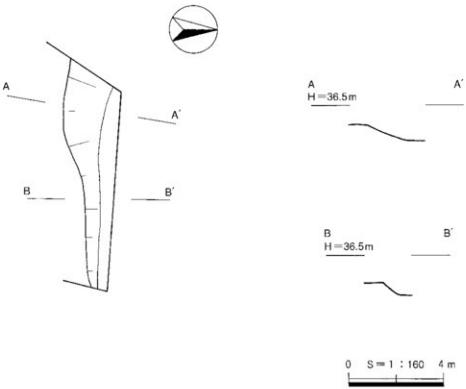
第５図　SD―01遺構図



第６図　SD―01上層出土遺物実測図



第７図　SD―01下層出土遺物実測図



第８図　SD―02遺構図

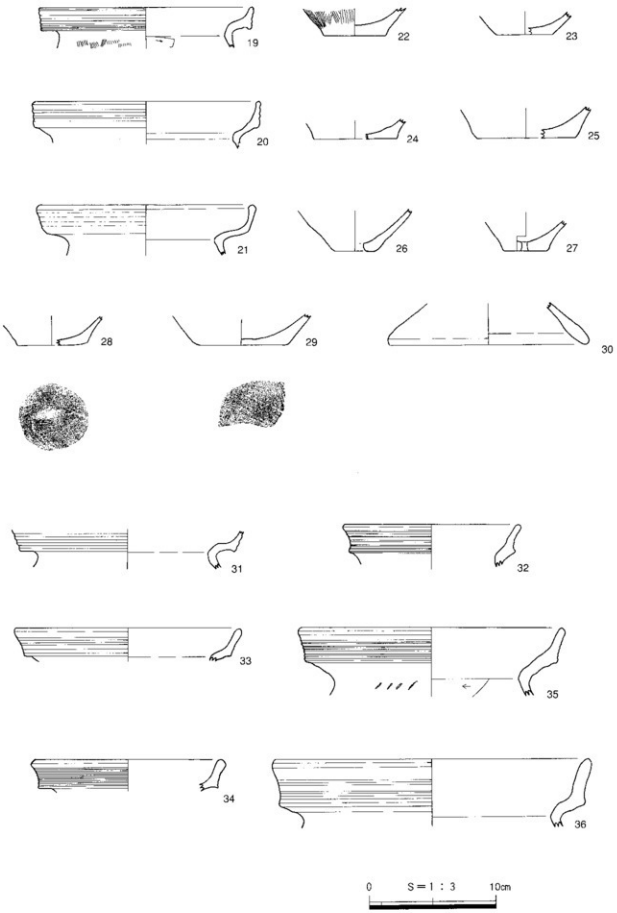
第３節　遺構外出土遺物（第９図、第10図）

遺構外出土遺物は須恵器と土師器が数点認められる以外は大部分が弥生土器である。

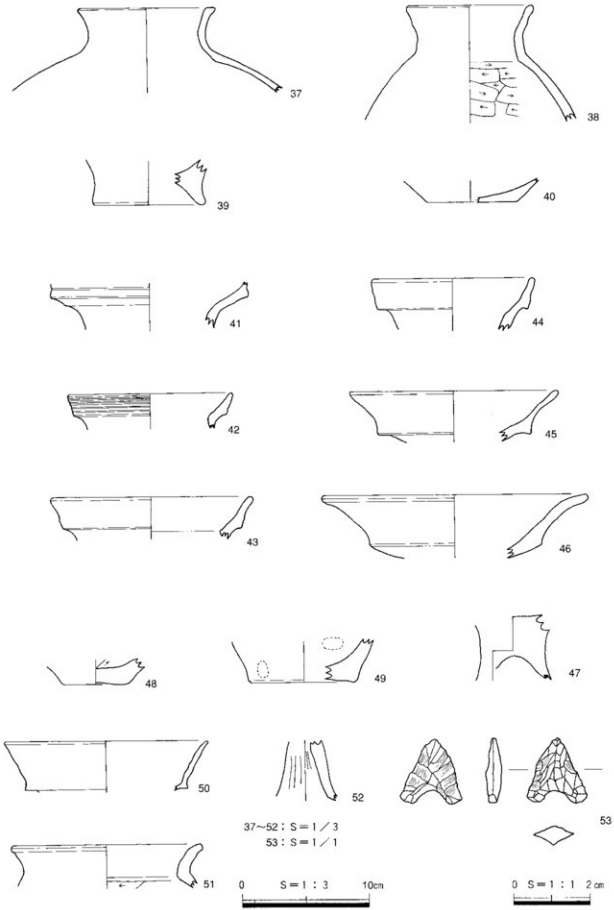
19～30は１区から出土したものである。19～21は複合口縁を有する甕で、19は口縁が外傾気味に立ち上がり、口縁帯下端は下垂している。20は口縁が直立して立ち上がり、21は口縁が外傾気味に立ち上がり、端部は肥厚している。口縁外面には19が４条、20が３条、21が４条の擬凹線が巡る。22～29は底部で、26、27には穿孔があり、28、29の底部外面には板目状の圧痕が認められる。30は高坏の脚部で、裾端部が肥厚する。

31～40は２区から出土したものである。31～36は複合口縁を有する甕で、31は外傾気味に立ち上がり、口縁帯下端は下垂している。32～36は外反気味に立ち上がり、32の口縁帯下端は横方へ突出している。33～36は口縁帯下端が下垂あるいは横方へ突出しないもので、33、36の口縁帯下端の稜はにぶいが、34、35の口縁帯下端の稜は鋭い。37、38は複合口縁を持たない壺で、口縁は外反して立ち上がり、37の端部は平坦面をなしている。38の端部は摩滅しているが、37と同様に平坦面をなしていたものと思われる。39、40は底部で、39は上げ底である。

41～53は３区から出土したものである。41～47は弥生土器である。41～43は甕で、41は口縁端部が欠損するが、口縁は短く、内傾気味に立ち上がり、外面には１条の凹線が巡る。42は口縁が外傾気味に立ち上がり、外面には５条の擬凹線が巡る。43は口縁が外反気味に立ち上がる。44、45は器台である。46、47は高坏である。46は坏部で、底部から内湾しながら立ち上がり、稜をなして口縁は大きく外反する。47は脚部である。50～52は土師器である。50、51は甕で、50は複合口縁を有し、口縁は外傾して立ち上がり、口縁帯下端は横方へ鋭く突出している。51は口縁がく字状に外反して立ち上がる。52は高坏の脚部、53は黒曜石製の石鏃である。



第９図　遺構外出土遺物実測図（１）



第10図　遺構外出土遺物実測図（2）

第４章　第２次調査の成果

第１節　調査の概要

第２次調査は工事着手前に工事による掘削範囲が拡がったため、緊急的に調査を行った。調査地は第１次調査地の１区の西側（４区）と２区・３区の北西側（５区）で、４区は尾根の東側斜面の標高45～48ｍに位置し、５区は尾根の北東側斜面から谷部にかけて位置する。

検出した遺構は段状遺構（ＳＳ－01）１基である。

第２節　検出した遺構と遺物

ＳＳ－01（第11図～第13図）

ＳＳ－01は４区で検出した。ＳＳ－01は南側は調査区外へのび、東側から北側にかけては工事によって削られており、全体の規模は不明であるが、現状で平坦面の長さ19.4ｍ、最大幅5.4ｍをはかり、平坦面の標高は45.2～46.0ｍである。壁面稜線は明確には確認できず、また、平坦面上では遺構を確認できなかった。

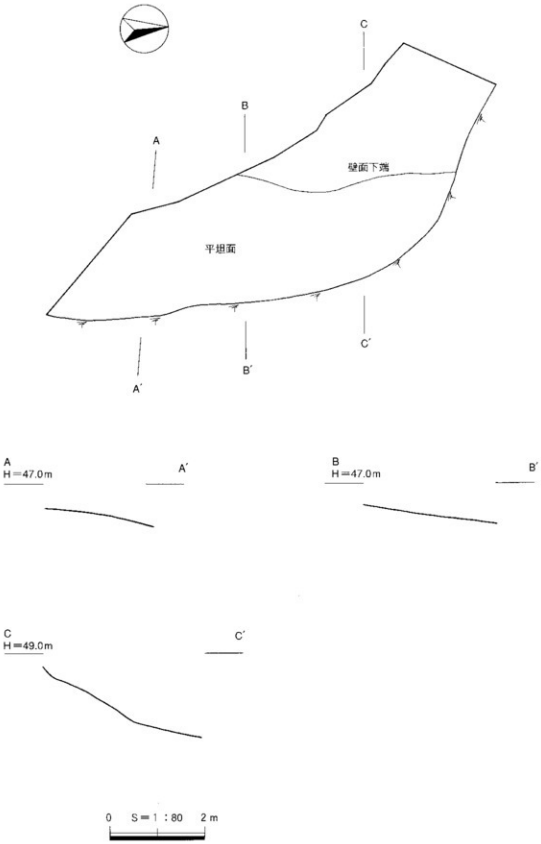
遺物は、平坦面では出土しておらず、表土から平坦面検出面までの堆積土層から出土した。弥生土器（60、61）がやや下層から出土しているが、他の土器はほとんど表土直下で出土している。

遺物は弥生土器と土師器が出土した。54～69、73～79は弥生土器、70～72は弥生土器あるいは土師器、80、81は土師器である。54～56は壺で、54、55は口縁が外反気味に立ち上がる。54の口縁外面は擬凹線を施した後にヨコナデを施しているものと思われる。また、55の口縁外面は摩滅が著しいが、擬凹線を施しているものと思われる。56は口縁が内傾気味に立ち上がり、口縁帯下端は下垂している。57、58は口縁が内湾気味に立ち上がるもので、58の口縁外面には３条の凹線が巡る。59～61は口縁が外反し、立上がりが長いものである。60の口縁外面は摩滅が著しいが、擬凹線を施しているものと思われる。また、61の口縁外面には７条の擬凹線が巡る。62～69は口縁が外反するが、59～61よりも立上がりが短いもので、さらに、62～67は口縁端部が肥厚する。口縁外面には62が５条の櫛描沈線、65が５条、66が12条の擬凹線が巡り、63、64も摩滅が著しいが、数条の擬凹線が巡る。67の口縁外面は櫛描沈線を施した後にヨコナデを施しているものと思われる。70～72は薄手の土器で、摩滅が著しく、調整は不明である。73～77は底部、78は高坏の脚部である。79は器台で、内面にはヘラミガキを施している。80、81は土師器の鉢で、体部は内湾して立ち上がり、口縁は大きく外方へ開く。

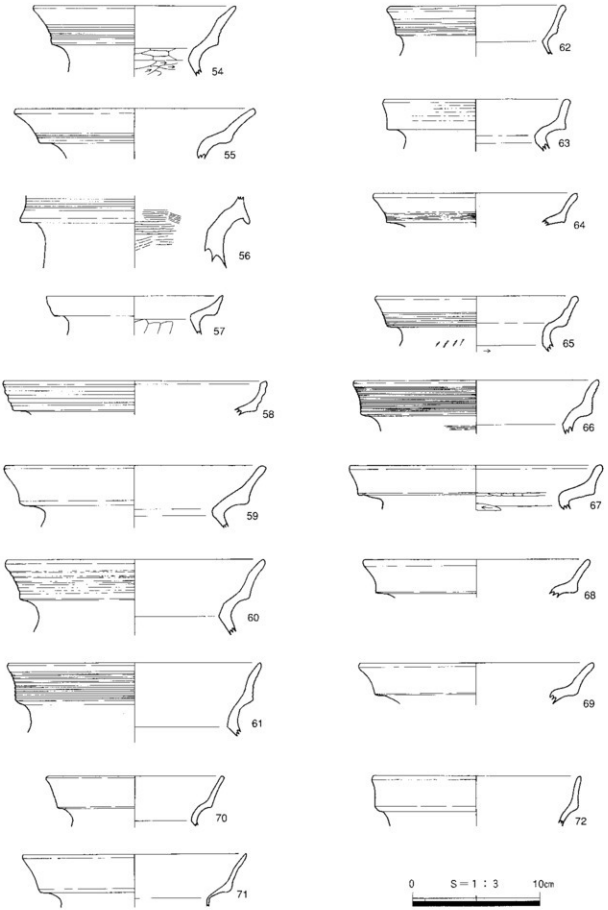
第３節　遺構外出土遺物（第14図）

82～85は５区の尾根の裾部から出土したもので、いずれも弥生土器の甕である。82は口縁が外傾気味に立ち上がり、口縁外面には３条の凹線が巡る。83は口縁がやや内湾気味に立ち上がるもので、口縁外面には４条の凹線が巡る。84、85は表土直下から出土したもので、いずれも口縁端部を上下につまみ出し、端面には刻み目が施されている。また、頸部には貼付突帯が巡り、胴部中位には長穀腹縁による刺突が施されている。

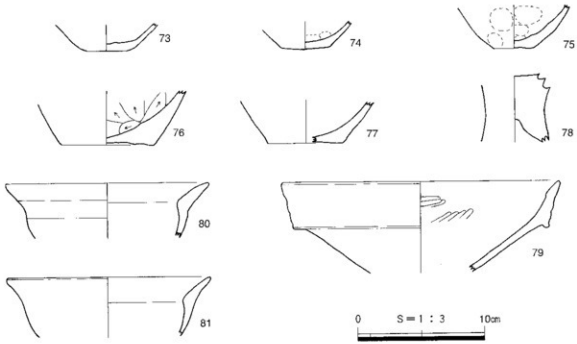
84、85はほぼ完形で、付近に竪穴住居跡等の遺構の存在が推定されたが、全く確認できなかった。また、この土器以外は後期以降のものであり、中期に属する遺物は他にない。しかし、谷を隔てた吉谷銭神遺跡では中期中葉～後葉の遺物、上器溜りが確認されており、何らかの関連があるかもしれない。



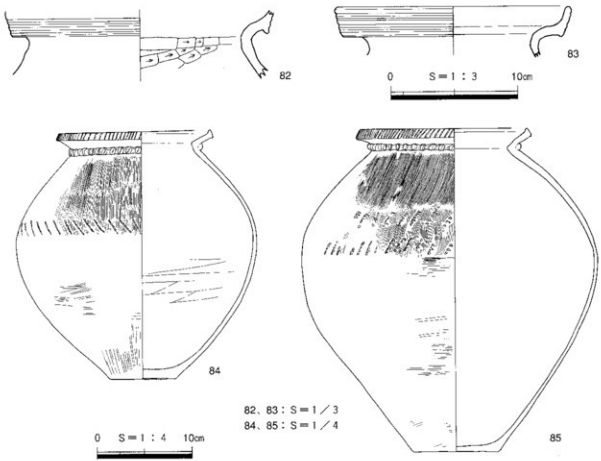
第11図　SS―01遺構図



第12図　SS―01出土遺物実測図（1）



第13図　SS―01出土遺物実測図（2）



第14図　遺構外出土遺物実測図

第5章　まとめ

今回の調査では段状遺構１基、溝状遺構１条、自然流路１条を確認したのみである。調査地は東西にのびる尾根の北側と東側の斜面に位置し、特に東側の斜面は傾斜が急であることもあって、遺構は希薄であった。なお、当調査地の西側の財団法人鳥取県教育文化財団の調査地でも北側斜面及び谷部では遺構は確認されていない。[1]しかし、尾根の頂部付近で弥生時代後期中葉～後葉の竪穴住居跡４棟、南東側の尾根裾部で同時期の竪穴住居跡２棟が確認され、当調査地のＳＳ－01の西側では段状遺構２基が確認されている。段状遺構からは弥生時代後期の土器が出土しているが、床面直上ではなく、上部から流れ込んだ埋土から出土しているもので、そのため、段状遺構の帰属時期は断定しがたいが、竪穴住居跡と同時期である可能性がある。当調査地のＳＳ－01も遺物の出土状況がこれらの段状遺構と同じ状況にあるが、これらの段状遺構及び竪穴住居跡と併存していた可能性がある。

今回の調査で出土した遺物は、須恵器が１点、土師器は古墳時代前期のものが数点認められる以外は大部分が弥生土器である。弥生土器は中期中葉と後期中葉～後期末のものが認められるが、主体となるのは後者である。中期中葉のものは５区の尾根の裾部から出土したもの（第14図84、85）のみである。84は胴部が球形を呈しており、当該期の甕としてはあまり例をみないものである。

後期中葉～後期末のものは尾根の頂部付近に展開する竪穴住居跡から転落したものであると考えられる。

当集落は出土遺物から弥生時代後期中葉～後期末のごく短期間に営まれたものであり、その前後の時期には集落の形成がほとんど行われていない。周辺では、古市宮ノ谷山遺跡[2]で弥生時代後期後葉～後期末、吉谷中馬場山遺跡[3]で弥生時代後期中葉～後期後葉に集落の形成が行われ、当遺跡と同様の傾向を呈している。なお、吉谷銭神遺跡[4]では弥生時代中期末～後期前葉の竪穴住居跡が確認され、弥生時代中期中葉～後期前葉の遺物が主に出土し、弥生時代後期中葉～後期末の遺物は出土量が少なくなる。このことから、弥生時代中期中葉～後期前葉には吉谷銭神遺跡で集落が形成されるが、弥生時代後期中葉～後期末になると当遺跡と吉谷中馬場山遺跡に集落が移動したものと考えられる。しかし、両遺跡とも短期間で集落が廃絶しており、その要因は現段階では不明であるが、当該期の社会的緊張状態が背景にあるのかもしれない。

註

（１）財団法人　鳥取県教育文化財団　『吉谷屋奈ヶ塔遺跡現地説明会資料』　2002
（２）財団法人　鳥取県教育文化財団　『古市遺跡群３　古市宮ノ谷山遺跡　古市古墳群』　2002
（３）財団法人　鳥取県教育文化財団　『吉谷中馬場山遺跡現地説明会資料』　2002
（４）財団法人　米子市教育文化事業団　『吉谷銭神遺跡Ⅰ』　2001

遺物観察表

遺物番号	層位番号	出土地点	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	6	SD-01上層	弥生土器	甕	※15.6	△ 3.3		内面：口縁部ヨコナデ、頸部横位刷毛目 外面：口縁部7条の櫛描波状文	密	良好	内面：淡黄褐色 外面：淡黄褐色	外面スス付着
2	6	SD-01上層	弥生土器	甕	※12.4	△ 3.1		内面：口縁部ヨコナデ 外面：摩滅のため調整不明	密	良好	内面：茶褐色 外面：赤褐色	
3	6	SD-01上層	弥生土器	甕	※14.4	△ 4.8		内面：摩滅のため調整不明 外面：口縁部櫛描線	密	良	内面：赤茶褐色 外面：赤茶褐色	外面スス付着
4	6	SD-01上層	弥生土器	甕	※17.6	△ 3.7		内面：摩滅のため調整不明 外面：摩滅のため調整不明	密	良好	内面：淡黄褐色 外面：淡黄褐色	
5	7	SD-01下層	弥生土器	甕	※18.2	△ 4.4		内面：摩滅のため調整不明 外面：口縁部4条の櫛描線、頸部ヨコナデ	密	良好	内面：淡褐色 外面：淡褐色	
6	7	SD-01下層	弥生土器	甕	※18.2	△ 4.7		内面：摩滅のため調整不明 外面：摩滅のため調整不明	密	良好	内面：褐色 外面：褐色	
7	7	SD-01下層	弥生土器	甕	※12.6	△ 3.4		内面：口縁部ヨコナデ 外面：口縁部櫛描線後ヨコナデ	密	良	内面：赤褐色 外面：淡褐色	外面黒斑
8	7	SD-01下層	弥生土器	壺	※13.6	△ 4.3		内面：摩滅のため調整不明 外面：口縁部櫛描線	密	良	内面：黄褐色 外面：茶褐色	
9	7	SD-01下層	弥生土器	壺	※22.0	△ 8.0		内面：口縁部ヨコナデ、頸部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ 外面：口縁部櫛描線、頸部ヨコナデ、波状文	密	良好	内面：暗褐色 外面：暗褐色	
10	7	SD-01下層	弥生土器	壺	14.0	△ 3.3		内面：口縁部ヨコナデ 外面：口縁部ヨコナデ	密	良好	内面：黄褐色 外面：黄褐色	
11	7	SD-01下層	弥生土器	甕	※15.8	△ 5.0		内面：口縁部ヨコナデ、頸部摩滅のため調整不明 外面：口縁部ヨコナデ、頸部ヨコナデ	密	良好	内面：赤褐色 外面：赤褐色	
12	7	SD-01下層	弥生土器	甕	※16.0	△ 4.3		内面：口縁部ヨコナデ、頸部ヘラケズリ 外面：口縁部ヨコナデ	粗	良好	内面：赤茶褐色 外面：赤茶褐色	
13	7	SD-01下層	弥生土器	甕	※17.0	△ 4.2		内面：摩滅のため調整不明 外面：摩滅のため調整不明	密	良好	内面：明黄褐色 外面：明黄褐色	
14	7	SD-01下層	弥生土器	甕	※21.2	△ 7.3		内面：摩滅のため調整不明 外面：摩滅のため調整不明	粗	良好	内面：明褐色 外面：暗褐色	外面スス付着
15	7	SD-01下層	弥生土器	甕	※14.2	△ 6.8		内面：口縁部ヨコナデ、頸部摩滅のため調整不明 外面：口縁部櫛描波線後ヨコナデ、頸部ヨコナデ	密	良	内面：橙褐色 外面：橙褐色	
16	7	SD-01下層	弥生土器	底部		△ 2.3	5.0	内面：指おさえ、ナデ 外面：ナデ	密	良好	内面：淡褐色 外面：褐色	外面黒斑
17	7	SD-01下層	弥生土器	底部		△ 2.0	5.5	内面：摩滅のため調整不明 外面：ナデ	密	良好	内面：褐色 外面：赤褐色	外面黒斑
18	7	SD-01下層	弥生土器	高坏	※15.5	10.7	7.4	内面：摩滅のため調整不明 外面：摩滅のため調整不明	粗	良	内面：淡黄褐色 外面：淡黄褐色	

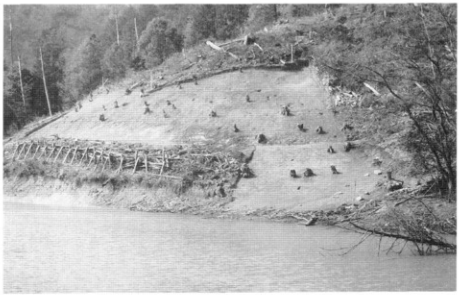
遺物番号	種別番号	出土地点	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
19	9	1区	弥生土器	甕	※ 18.6	△ 3.1		内面：口縁部ヨコナデ、頸部ヘラケズリ 外面：口縁部4条の櫛間擦、頸部ハケ調整	密	良好	内面：灰褐色 外面：明褐色	外面スス付着
20	9	1区	弥生土器	甕	※ 17.4	△ 3.8		内面：口縁部ヨコナデ 外面：口縁部3条の櫛間擦	密	良	内面：赤褐色 外面：赤褐色	
21	9	1区	弥生土器	甕	※ 16.6	△ 4.0		内面：口縁部ヨコナデ 外面：口縁部4条の櫛間擦	密	良好	内面：褐色 外面：明褐色	外面スス付着
22	9	1区	弥生土器	底部		△ 2.2	※ 4.8	内面：ナデ 外面：ハケ調整	やや粗	良好	内面：赤褐色 外面：赤褐色	
23	9	1区	弥生土器	底部		△ 1.7	※ 4.4	内面：摩滅のため調整不明 外面：摩滅のため調整不明	密	良好	内面：褐色 外面：褐色	外面黒斑
24	9	1区	弥生土器	底部		△ 1.7	※ 6.6	内面：ナデ 外面：摩滅のため調整不明	やや粗	良好	内面：黄褐色 外面：赤褐色	
25	9	1区	弥生土器	底部		△ 2.5	※ 7.6	内面：摩滅のため調整不明 外面：摩滅のため調整不明	密	良好	内面：灰褐色 外面：灰褐色	外面黒斑
26	9	1区	弥生土器	底部		△ 3.3	※ 3.6	内面：摩滅のため調整不明、底部穿孔 外面：摩滅のため調整不明	密	良好	内面：黒褐色 外面：灰褐色	
27	9	1区	弥生土器	底部		△ 2.5	3.6	内面：摩滅のため調整不明、底部穿孔 外面：摩滅のため調整不明	やや粗	良好	内面：赤褐色 外面：赤褐色	
28	9	1区	弥生土器	底部		△ 2.3	5.5	内面：ナデ 外面：ナデ、底部板目状圧痕	密	良好	内面：褐色 外面：黒褐色	外面黒斑
29	9	1区	弥生土器	底部		△ 2.4	※ 7.2	内面：ナデ 外面：ナデ、底部板目状圧痕	密	良好	内面：暗褐色 外面：暗褐色	外面黒斑
30	9	1区	弥生土器	高坏		△ 3.3	※ 15.4	内面：摩滅のため調整不明 外面：摩滅のため調整不明	粗	良	内面：淡白褐色 外面：淡白褐色	
31	9	2区	弥生土器	甕		△ 3.1		内面：口縁部ヨコナデ 外面：口縁部3条の櫛擦	密	良好	内面：茶褐色 外面：茶褐色	
32	9	2区	弥生土器	甕	※ 13.6	△ 3.4		内面：口縁部ヨコナデ 外面：口縁部9条の櫛間擦	密	良	内面：淡褐色 外面：淡褐色	外面スス付着
33	9	2区	弥生土器	甕	※ 17.6	△ 2.6		内面：口縁部ヨコナデ 外面：口縁部櫛間擦ヨコナデか	密	良好	内面：淡褐色 外面：淡褐色	外面スス付着
34	9	2区	弥生土器	甕	※ 14.6	△ 2.5		内面：口縁部ヨコナデ 外面：口縁部7条の櫛間擦	密	良好	内面：明褐色 外面：明褐色	
35	9	2区	弥生土器	壺	20.4	△ 5.4		内面：口縁部ヨコナデ、頸部ヘラケズリ 外面：口縁部3条の櫛間擦、頸部以下刷毛目による刺突	密	良好	内面：褐色 外面：褐色	外面スス付着
36	9	2区	弥生土器	甕	※ 24.6	△ 5.4		内面：口縁部ヨコナデ、頸部ヘラケズリ 外面：口縁部櫛描波状後ヨコナデ	密	良好	内面：褐色 外面：褐色	
37	10	2区	弥生土器	壺	※ 10.6	△ 6.7		内面：摩滅のため調整不明 外面：摩滅のため調整不明	密	良好	内面：淡白褐色 外面：淡白褐色	
38	10	2区	弥生土器	壺	※ 9.4	△ 9.3		内面：口縁部摩滅のため調整不明、頸部ヘラケズリ 外面：摩滅のため調整不明	密	良好	内面：橙褐色 外面：橙褐色	

出土番号	掲載番号	出土地点	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
39	10	2区	弥生土器	底部		△ 3.6	8.4	内面：摩滅のため調整不明 外面：摩滅のため調整不明	密	良好	内面：赤褐色 外面：赤褐色	
40	10	2区	弥生土器	底部		△ 1.8	※ 7.0	内面：摩滅のため調整不明 外面：ナデ	密	良好	内面：暗褐色 外面：暗褐色	外面黒斑
41	10	3区	弥生土器	甕	※ 15.0	△ 3.6		内面：摩滅のため調整不明 外面：口縁部1条の凹線	粗	良好	内面：橙褐色 外面：橙褐色	
42	10	3区	弥生土器	壺	※ 12.8	△ 2.8		内面：摩滅のため調整不明 外面：口縁部3条の櫛凹線	密	良好	内面：淡白褐色 外面：淡白褐色	
43	10	3区	弥生土器	壺	※ 12.6	△ 3.4		内面：摩滅のため調整不明 外面：ヨコナデ	密	良好	内面：褐色 外面：褐色	
44	10	3区	弥生土器	高台	※ 12.6			内面：摩滅のため調整不明 外面：摩滅のため調整不明	密	良	内面：赤褐色 外面：赤褐色	
45	10	3区	弥生土器	高台	※ 18.2			内面：摩滅のため調整不明 外面：摩滅のため調整不明	粗	良	内面：淡褐色 外面：淡褐色	
46	10	3区	弥生土器	高坏	※ 20.6	△ 5.0		内面：摩滅のため調整不明 外面：摩滅のため調整不明	密	良好	内面：淡褐色 外面：淡褐色	
47	10	3区	弥生土器	高坏		△ 5.1		内面：ナデ 外面：ナデ	密	不良	内面：橙褐色 外面：橙褐色	
48	10	3区	弥生土器	底部		△ 2.0	5.0	内面：ヘラケズリ 外面：ナデ	密	良好	内面：橙褐色 外面：橙褐色	
49	10	3区	弥生土器	底部		△ 3.4	※ 8.6	内面：ナデ 外面：ナデ	粗	良	内面：淡黄褐色 外面：淡黄褐色	
50	10	3区	土師器	甕	※ 15.8	△ 3.9		内面：ヨコナデ 外面：摩滅のため調整不明	密	良好	内面：淡褐色 外面：淡褐色	
51	10	3区	土師器	甕	※ 14.6	△ 3.5		内面：口縁部ヨコナデ、頸部ヘラケズリ 外面：ヨコナデ	密	良	内面：橙褐色 外面：橙褐色	
52	10	3区	土師器	高坏		△ 4.8		内面：ヘラケズリ、絞り 外面：ヘラミガキ	密	良	内面：赤褐色 外面：赤褐色	
53	10	3区	石	鏃	長 1.8	最幅 1.6	厚 0.4					黒曜石製
54	12	SS－01	弥生土器	壺	※ 15.8	△ 5.6		内面：口縁部ヨコナデ、頸部ヘラケズリ 外面：口縁部櫛回線後ヨコナデ、頸部ヨコナデ	密	良好	内面：赤褐色 外面：赤褐色	内面黒斑
55	12	SS－01	弥生土器	壺	※ 18.6	△ 4.0		内面：ヨコナデ 外面：口縁部櫛回線か	密	良	内面：赤褐色 外面：赤褐色	
56	12	SS－01	弥生土器	壺		△ 5.7		内面：口縁部ヨコナデ、頸部ハケ調整 外面：口縁部6条以上の櫛凹線、頸部ヨコナデ	密	良	内面：褐色 外面：褐色	
57	12	SS－01	弥生土器	甕	※ 13.4	△ 3.1		内面：口縁部摩滅のため調整不明、頸部ヘラケズリ 外面：摩滅のため調整不明	密	良好	内面：淡白褐色 外面：淡白褐色	
58	12	SS－01	弥生土器	甕	※ 20.6	△ 2.7		内面：ヨコナデ 外面：3条の凹線か	密	良好	内面：赤褐色 外面：赤褐色	外面スス付着

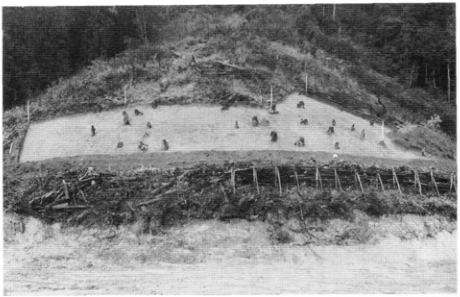
遺物番号	図版番号	出土地点	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
59	12	SS−01	弥生土器	甕	※ 20.2	△ 4.9		内面：摩滅のため調整不明 外面：摩滅のため調整不明	密	良好	内面：赤褐色 外面：暗褐色	
60	12	SS−01	弥生土器	甕	※ 20.2	△ 6.0		内面：摩滅のため調整不明 外面：口縁部櫛間線か	やや粗	良	内面：橙褐色 外面：橙褐色	
61	12	SS−01	弥生土器	甕	※ 19.6	△ 5.8		内面：摩滅のため調整不明 外面：口縁部7条の櫛間線、頸部ヨコナデ	密	良	内面：橙褐色 外面：橙褐色	
62	12	SS−01	弥生土器	甕	※ 13.6	△ 4.0	12.0	内面：摩滅のため調整不明 外面：口縁部5条の櫛描沈線、頸部摩滅のため調整不明	密	良好	内面：淡白褐色 外面：淡白褐色	外面黑斑
63	12	SS−01	弥生土器	甕	※ 14.2	△ 4.1		内面：摩滅のため調整不明 外面：口縁部櫛間線か	密	良好	内面：橙褐色 外面：橙褐色	
64	12	SS−01	弥生土器	甕	※ 16.0	△ 2.6		内面：ヨコナデ 外面：口縁部数条の櫛間線	密	良	内面：淡褐色 外面：淡褐色	外面スス付着
65	12	SS−01	弥生土器	甕	※ 15.6	△ 4.4		内面：口縁部ヨコナデ、頸部ヘラケズリ 外面：口縁部3条の櫛間線、頸部民窯痕跡による調整	密	良好	内面：褐色 外面：褐色	
66	12	SS−01	弥生土器	甕	※ 19.0	△ 4.0		内面：ヨコナデ 外面：口縁部12条の櫛間線か、頸部ハケ調整	密	良好	内面：明褐色 外面：明褐色	外面スス付着
67	12	SS−01	弥生土器	甕	※ 19.8	△ 3.5		内面：ヨコナデ 外面：ヨコナデか	密	良好	内面：橙褐色 外面：橙褐色	
68	12	SS−01	弥生土器	甕	※ 17.6	△ 3.0		内面：摩滅のため調整不明 外面：摩滅のため調整不明	密	良好	内面：淡白褐色 外面：淡白褐色	外面黑斑
69	12	SS−01	弥生土器	甕	※ 18.2	△ 3.2		内面：摩滅のため調整不明 外面：摩滅のため調整不明	やや粗	良	内面：茶褐色 外面：暗褐色	
70	12	SS−01	弥生土器 or 土師器	甕	※ 13.6	△ 4.0		内面：摩滅のため調整不明 外面：摩滅のため調整不明	密	良好	内面：淡白褐色 外面：淡白褐色	
71	12	SS−01	弥生土器 or 土師器	甕	※ 17.4	△ 4.2		内面：摩滅のため調整不明 外面：摩滅のため調整不明	密	良好	内面：暗褐色 外面：淡褐色	
72	12	SS−01	弥生土器 or 土師器	甕	※ 18.2	△ 4.9		内面：摩滅のため調整不明 外面：摩滅のため調整不明	密	良好	内面：明褐色 外面：明褐色	
73	13	SS−01	弥生土器	底部		△ 2.2	※ 3.0	内面：摩滅のため調整不明 外面：摩滅のため調整不明	密	良	内面：明褐色 外面：明褐色	外面スス付着
74	13	SS−01	弥生土器	底部		△ 2.2	※ 3.8	内面：ナデ、指おさえ 外面：摩滅のため調整不明	密	良	内面：明褐色 外面：明褐色	外面黑斑
75	13	SS−01	弥生土器	底部		△ 3.4	※ 3.0	内面：ナデ、指おさえ 外面：摩滅のため調整不明	密	良好	内面：淡褐色 外面：暗褐色	外面黑斑
76	13	SS−01	弥生土器	底部		△ 4.3	※ 7.0	内面：ナデ 外面：ナデ	密	良	内面：淡褐色 外面：暗褐色	外面黑斑
77	13	SS−01	弥生土器	底部		△ 3.3	※ 6.0	内面：摩滅のため調整不明 外面：ナデ	密	良	内面：淡白褐色 外面：茶褐色	
78	13	SS−01	弥生土器	高坏		△ 5.2		内面：ナデ 外面：摩滅のため調整不明	密	良	内面：明褐色 外面：明褐色	

遺物番号	図版番号	出土地点	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
79	13	ＳＳ－01	弥生土器	壺	※ 21.2	△ 7.1		内面：ヘラミガキ 外面：摩滅のため調整不明	密	良	内面：暗褐色 外面：暗褐色	
80	13	ＳＳ－01	土師器	鉢	※ 16.0	△ 4.3		内面：摩滅のため調整不明 外面：ヨコナデ	やや粗	良	内面：赤褐色 外面：赤褐色	
81	13	ＳＳ－01	土師器	鉢	※ 15.8	△ 4.8		内面：口縁部摩滅のため調整不明、頸部ヨコナデ 外面：摩滅のため調整不明	密	良	内面：赤褐色 外面：赤褐色	
82	14	5区	弥生土器	壺	※ 21.0	△ 5.5		内面：ヨコナデ 外面：口縁部3条の凹線、頸部ヨコナデ	密	良好	内面：赤褐色 外面：赤褐色	外面黒斑
83	14	5区	弥生土器	壺	※ 18.2	△ 4.0		内面：ヨコナデ 外面：口縁部4条の凹線か、頸部ヨコナデ	密	良好	内面：赤褐色 外面：赤褐色	
84	14	5区	弥生土器	壺	15.8	26.5	6.7	内面：ヘラケズリ 外面：口縁部刻み目、頸部櫛状文帯、胴部ハケ調整、胴部中位貼付凹線による刺突、胴部下半へラミガキ	やや粗	やや良	内面：淡褐色 外面：淡褐色	
85	14	5区	弥生土器	壺	17.3	34.3	9.0	内面：摩滅のため調整不明 外面：口縁部刻み目、頸部櫛状文帯、肩部ハケ調整、胴部中位貼付凹線による刺突、胴部下半へラミガキ	やや粗	やや良	内面：淡褐色 外面：淡褐色	

図　　版



全景（北から）



1 区全景（東から）

1 区斜面（北から）

図版 2

2 区・3 区全景（北から）

SD－01（東から）

SD－02（西から）

SS－01（北から）

SS－01西側断面

5区遺物（84、85）
出土状況

図版 4

1

2

3

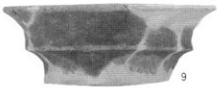
4

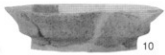
5

6

7

8


9


10

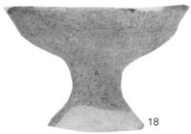
11

12

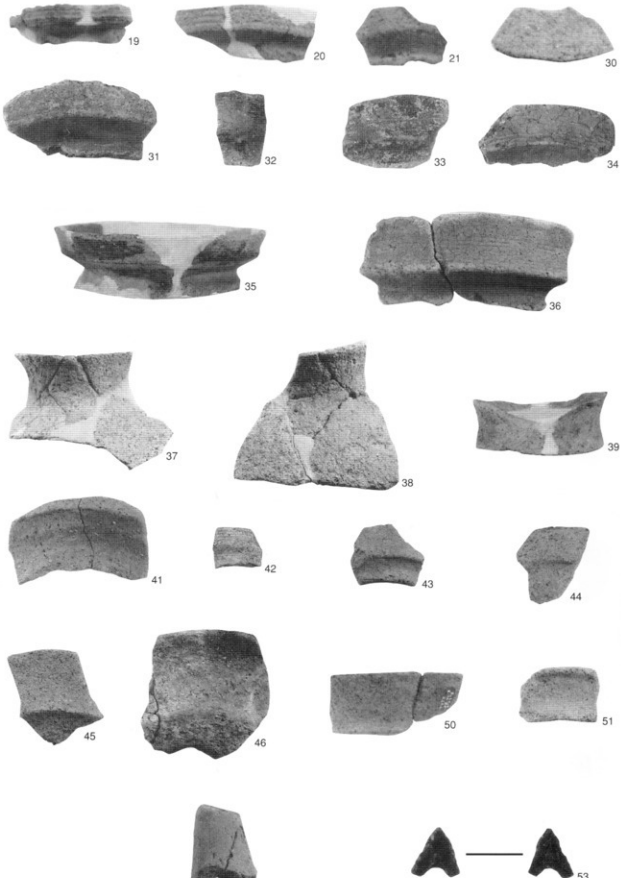
13

14

15

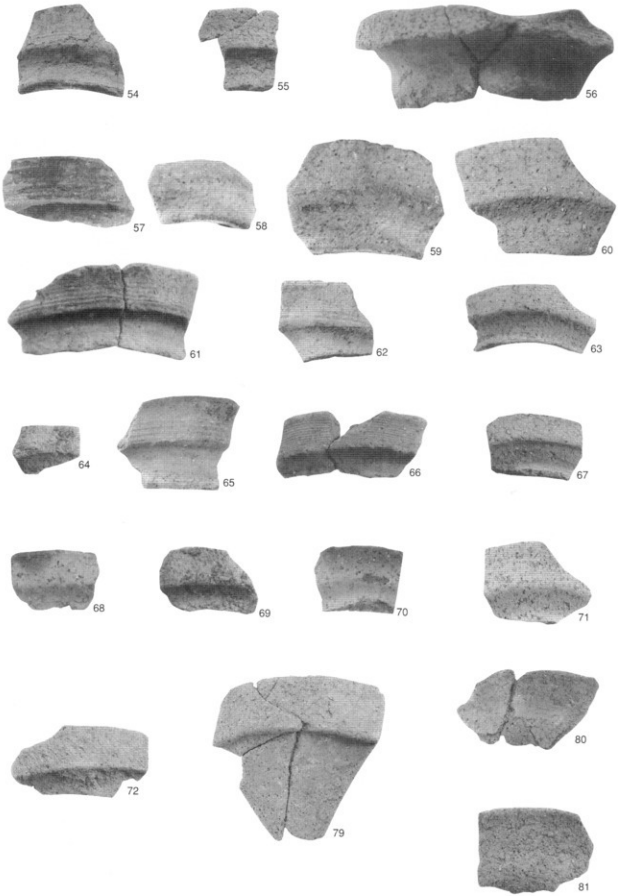

18

SD－01出土遺物



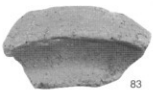
1 ～ 3 区遺構外出土遺物

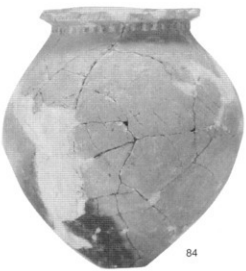
図版 6

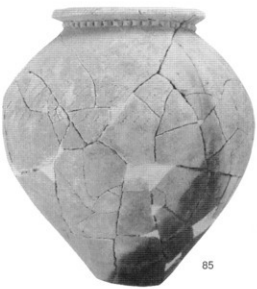


SS－01出土遺物

82


83


84


85

5 区遺構外出土遺物

報 告 書 抄 録

ふ り が な	よしたにやながざこいせき
書　　名	吉谷屋奈ヶ塔遺跡 第1次・第2次調査
副 書 名	
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	(財)米子市教育文化事業団文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	42
編 著 者 名	高橋浩樹 下高瑞哉
編 集 機 関	財団法人 米子市教育文化事業団 埋蔵文化財調査室
所　在　地	〒683−0033 鳥取県米子市長砂町935−1 TEL (0859) 22−7209
発行年月日	西暦2003年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °　′　″	東経 °　′　″	調査期間	調査面積	調査原因
よしたにやながざこいせき 吉谷屋奈ヶ塔遺跡	とっとりけんよなごしよしたに 鳥取県米子市吉谷	31202		35度 22分 54秒	133度 20分 18秒	20000213～ 20000326 20011001～ 20011026	1,200㎡ 300㎡	一般国道180号 道路改良工事

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主　な　遺　物	特　記　事　項
吉谷屋奈ヶ塔遺跡	集落跡	弥生時代	溝状遺構 段状遺構	弥生土器 土師器 須恵器 石鏃	

(財)米子市教育文化事業団文化財発掘調査報告書４２

吉谷屋奈ヶ埼遺跡

２００３年３月

編集・発行　財団法人　米子市教育文化事業団

〒６８３－００３３　鳥取県米子市長砂町９３５－１

印　　刷　(有)米子プリント社